

一金千七百八十圓	宮崎縣負擔額
(千三百三十五圓)	
一金三千七百三圓	鹿兒島縣負擔額
(二千七百七十七圓)	
合計二萬五千圓	

となつてゐるが、兩者を比較して見ると、長崎・熊本に於て著しく減じ、福岡・大分・佐賀・宮崎・鹿兒島に於て相當額を増してゐるのは、「斯ク修正議決セシ要旨ハ七縣聯合ノ學校費ナレハ其分擔額ニ於テモ一半ハ各縣國稅高及地方稅高ヲ率トシ一半ハ人口數ヲ率トシテ之ヲ定ムルハ正當ニシテ生徒修學等ノ便否ニ依リ特ニ學校設置及醫學部所在ノ縣ヘ増加スヘキノ理ナシ」と云ふに在つたものゝ如くである。(明治二十年十月二十七日官報)

然るに同年八月七日、内務大藏兩大臣連署を以て、來る二十二年以降は、追つて何分の心得方相示す迄、地方稅の分擔を止むる旨の通知があつた。(濱尾氏演述參看)而して明治二十一年八月二十二日の官報には、「熊本縣ニ於テ第五高等中學校明治二十二年年度經費分擔額議定委員ヲ互選セシメタルニ常置委員嘉悅信之、紫藤寛治、菅貫ノ三名當選セリ」とあれば、果して二十二年以降止められたか否かは分明でない。

明治廿一年九州各縣人口比較

長崎縣	七〇八、五一三人
福岡縣	一、一四六、六〇九人
大分縣	七六一、五五六人
佐賀縣	五二三、九二七人
熊本縣	一、〇〇三、三七〇人

二十一年九州各縣人口比較

宮崎縣	三八三、二四七人
鹿兒島縣	九三五、六一五人

九州各縣尋常中學校及生徒數

の數を示してゐるが、又、各尋常中學校を比較して見れば、

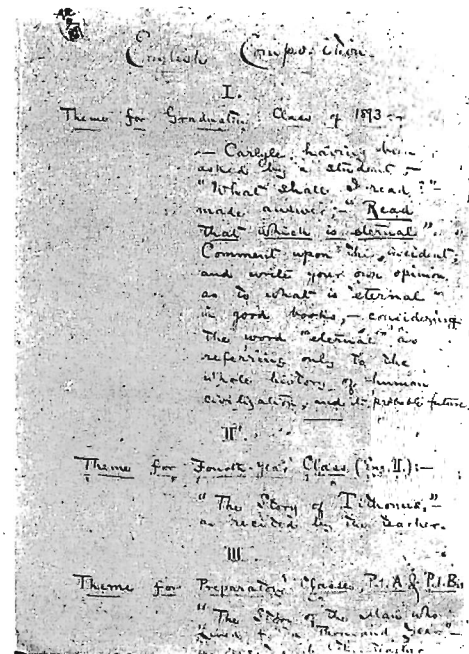
校名	調査日	五年	四年	三年	二年	一年	總計	一ヶ年經費
長崎縣尋常中學校	明治廿二年十一月一日	一六	一九	四四	五四	一〇八	二四一	八、三四三・九三一
私立大村尋常中學校	—	一一	二五	三六	四四	八一	一九七	四、五八三・四一八
平戸猶興館	明治廿二年十一月中旬	—	二一	五六	四七	四八	一七二	四、七一〇・〇〇〇
福岡縣修猷館	明治廿二年九月末	二七	五一	五七	二九	二〇三	三六七	七、三三三・三三五
豐津尋常中學校	明治廿二年十月末	二〇	二八	三八	七八	一〇五	二六九	五、二八四・〇〇〇
久留米明善校	—	一六	二五	三七	八〇	一三一	二八九	四、二七五・〇〇〇
柳川橋蔭學館	明治廿二年十一月初	一四	二三	三五	五三	八〇	二〇五	五、九一一・〇〇〇
大分縣尋常中學校	明治廿二年十一月初	一〇	一四	三〇	四五	七一	一七〇	六、八四三・二〇五
佐賀縣尋常中學校	明治廿二年十月末	二六	四一	七七	一〇一	一二二	三五七	九、三七二・〇〇〇
私立濟々養	明治廿二年十一月廿四日	—	八	三六	九五	一四七	二八六	四、一一八・五二〇
宮崎縣尋常中學校	明治廿二年十二月初	—	—	—	—	八〇	八〇	二、四七七・八五三

となつてゐる。以て當時に於ける九州各縣民度の一端を知ることが出來よう。

第四節 御宸署の勅語と勅語演説

第三章 新校建築と其後の第五高等中學校

我が校の寶物は何かと問はれたならば、誰しも言下に、御宸署の勅語並に「瑞邦」「濟美」の御額だと答へるに相違ない。又、準校實とも稱すべきものには、竣工間もない頃の寫眞、勝海舟翁の額、嘉納校長の額、ヘルン氏の試験問題、夏目教授の祝辭等であらうか。



部一の題問験試の氏ンルへ

祥氏譯泰西勸善訓蒙、ウエーランド原著阿部泰藏譯修身論、ビシオリンロ原著津田信道・西周筆記神田判官譯性法略等の口授に止め、それ以上の級より上等小學には、何等課することもないと云ふ有様であつたのである。而して勸善訓蒙の如き、フランス共和國の政治主義や、基督教の教義に依るものであることは勿論である。且又、

抑々明治改元の當初に於て、明治二年太政官布告には、「漢洋は皇道の羽翼たるべき事」と明示されてはゐるが、大勢の赴くところ、泰西の文明に心酔して、事細大となく取入れたことは曩にも述べたが、殊に明治五年の學制頒布に際しても、國民の徳育に關しては、何等の主義方針もなく、例へば下等小學校の第一年級の修身は、之をぎやうぎと訓じて、福澤氏譯童蒙をしへ草の如きものを口授し、第二年級に在りては、佛國ボンヌ原著箕作麟



夏目教授の祝辭

中學校に於ては、その後編・續編や、箕作氏譯佛蘭西民法等を採用してゐたところも少なくないと云ふ有様である。かくて明治十一年頃から、法律書採用の儀は中止せられ、十四年には、畏くも明治天皇の敕覽を仰いだ後に、小學校教員心得なるものが頒布せられ、中等科に課すべき歴史の如きも、建國の體制以下の諸項目に於て「務メテ生徒ヲシテ沿革ノ原因結果ヲ了解セシメ殊ニ尊王愛國ノ志氣ヲ養成センコトヲ要ス」と示されてゐる。さりながら、明治十七八年頃に於ける小學兒童は、君臣の關係すら之を明識してゐる者が少ないと云ふに至つては、洵に憂慮に堪へない次第で、明治天皇が、茨城縣下の大演習から還御遊ばされて間もなく、千古不磨の勅語を、山縣總理・芳川文相を御召しの上御下賜になつたことは人の知る通りである。而して勅語中の「常ニ國憲ヲ重シシ國法ニ遵ヒ」の一句に關して、之を入るべきか否かに就いて、元田侍講と芳川文相との間に意見の相違が生じ、半年近くも御手許に止め置かせられ、御熟考の末御決定遊ばされたと拜聞するだに畏き極みで、二賢の意圖は、時代の風潮を物語るものであると考へられる。

此の如くにして、今や全く國民道德涵養の一大方針は確立せられ、文部省は、訓令第八號を以て、

今般教育ニ關シ

勅語ヲ下シタマイタルニ付其謄本ヲ頒チ本大臣ノ訓示ヲ發ス管内公私立學校へ各一通ヲ交付シ能ク
聖意ノ在ル所ヲシテ貫徹セシムヘシ

勅語奉讀
式と演説

熊本縣に
於ける勅
語謄本交
付式

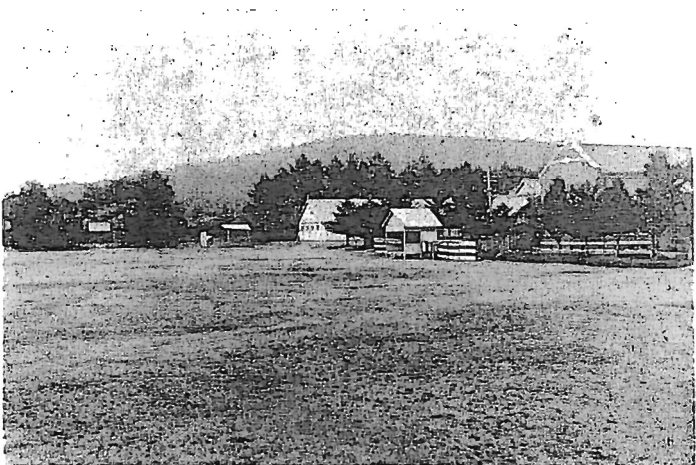
御宸署の
勅語下賜

醫學部に
於ける奉
拜式と奉
校長室本
にある勅
語の大額

との訓令を發し、同時に訓示をも出した。本校に於ては、煥發の直後即ち十一月二十三日、新嘗祭の佳辰をトシ
て、午前八時より、雨天體操場に於て、奉讀式を舉行し、中川校長、恭しく、勅語を奉讀、續いて訓話を爲し
たる後、秋月胤永教授は、至誠丹心を罩めて、一場の演説を試みたのであるが、時と人とを得たその奉讀式並に
演説が、如何に深刻なる印象を與へたかは、唯々想像するだけである。因みに、熊本縣に在りては、二十四年一
月六日、各都市長各縣立學校長等を廳内に召集して、勅語謄本の交付式を行つた。

然るに、本校に對して、畏くも 明治天皇が、御名御宸署の勅語を賜はつたと云ふことは、當時の高等中學校
が、如何に世に重んぜられてゐたかが解るであらう。乃ち、明治二十四年一月二十二日、平山校長が、恭しく奉
持して歸任するや、校を舉げて恐懼欣躍し、奉戴式舉行の後には、大正六年五月、奉安所竣成まで、本館階上玄關
上の一室に奉置し、二十四年の天長節には、午前九時、一同本館前に整列、校長教授の外は、二名乃至三名宛、
御眞影と勅語とを拜したる後、雨天體操場に於て、謄本の奉讀及び演説を爲し、天長節の歌を齊唱し、式後、一
同寄宿舎食堂に於て、祝酒を供せられてゐる。

因みに、醫學部へ御下賜の 勅語に就いては、同年二月十二日、奉拜并奉讀式を執行したが、校長室に奉掲し
てある 勅語の大額に就いては、左の通り熊本縣屬宮川某の謹書に係る旨の記録が、大正四年雜件綴の中に遺つ
てゐる。



御眞影奉安所 (上) 大正九年三月太皇太后殿下啓行時
(下) 昭和十一年三月奉還、現在ニ至ル



御聖影奉安室

大額

一個

右ハ教育ニ關スル勅語ニシテ熊本縣屬宮川某ニ依頼シ奉寫シタルモノナリ元瑞邦館ニ奉掲シアリシヲ同館ヲ柔

道ノ教場ニ充テタル際奉安室ニ移藏ス

秋月教授
の「勅語
演説」



授 教 月 秋

筆者の調査する所に依れば、宮川某は、富岡知事時代の縣屬で、巖谷一六流の書を善くし、時折知事の代筆をも命ぜられてゐたと云ふ。従つて、奉寫したのも、恐らく明治二十四年のことと察せられる。

秋月教授は、その後も各地に演説を頼まれて、國體の本義、忠君愛國、國民道德等を闡明したのであるが、二十四年十月には勅語演説を乙夜の覽に供し奉り、二十八年

五月辭職の直前には、本校に於て之が印行を爲したのである。而してその内容は、當時の龍南會雜誌にも連載されてゐる。

勅語演説
ヲ進ツル
表

勅語演説ヲ進ツル表

臣 秋 月 胤 永

薰沐九拜謹テ表ヲ上ル臣不肖叨リニ乏ヲ熊本第五高等中學校教授ノ職ニ承ク伏シテ惟ミルニ

陛下光明隆渥ナル無前ノ 歡慮ヲ垂レサセラレ去年十月三十日ヲ以テ乃チ教育ノ 勅語ヲ降シ賜ヒ教導ノ基礎

之ニ由リテ固ク立チ生徒ノ方向之ニ由リテ
堅ク定マリ多岐亡羊ノ迷夢一期ニシテ醒メ
タリ臣等教導ノ職ヲ奉スルモノ欽喜雀躍ノ
至ニ堪ヘス是ニ於テ日夜黽勉以テ微力ヲ盡
シ深ク 聖旨ヲ生徒ノ心肝ニ貫徹セシメン
コトヲ庶幾ヒ畏クモ宣リ給ヒシ 大御心ノ
存スル處ヲ敷衍シテ一書ヲ草シ以テ倫理講
説ノ資ニ供セリ因リテ今謹テ之ヲ闕下ニ奉
進ス若シ乙夜ノ叙覽ヲ賜ハハ臣ノ光榮何モ
ノ力之ニ過キン謹テ表ヲ奉シテ以聞ス臣胤
永誠惶誠恐頓首頓首

勅語演説

明治二十四年十月

第五高等中學校教授 正七位 秋 月 胤 永

中川校長
の序文

次に、中川校長の「勅語演説の序」を引用すれば、

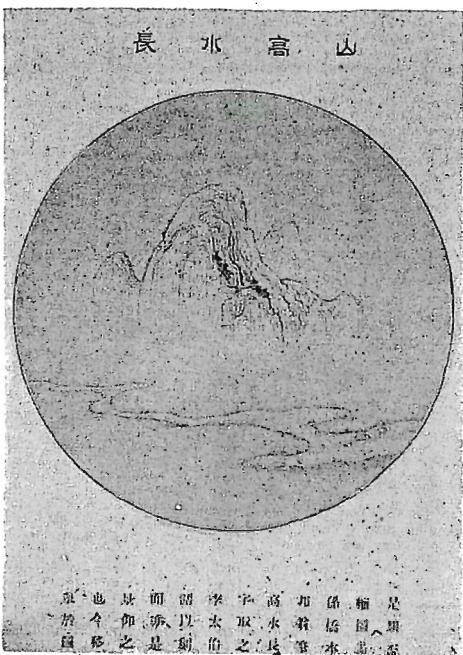
世界萬國多かれとも、開闢この方、帝統連綿、金匱無缺なる、我が御國のとき、それ何處にかある、殊に我が御聖文武なる、今上天皇に至りて、嚮きに勅語を降し給ひて、始めて教育の道を教へ給ひしより、山間僻陬、到らぬ限なく、聖意の遍く人心に感孚せしことは、更にも言はず、遠き外國までも、その盛徳の聞えけるこそいとも々々尊き御事なれ、嘗て露國の海軍軍醫のなにかし、我が校に來りしとき、倫理教場に至り、勅語の御趣旨を聞き、いたく感激して、やがてその膽本を請ひ求めけるに、與へければ、なにかし大に謝していへらく、學校にて、一の宗教をも教へず、皇帝の勅語を授くるは、萬國に比類なき事なり、予必すこれを我が語に譯して本國に送るへしと言へり、今や征清連勝、土地割領の勢につれて、我が國の武威の全世界に赫々たるも、さきに軍隊に降し給ひし勅諭に基つかすはあらずかし、されは、教育の勅語の、文運を隆興し、國光を宣揚する大基本たること、素より予か言を待たさることなれば、益その聖旨を發揮して、國民の腦裏に徹底せしめんこと豈國家の急務ならさめやは、茲に吾が章軒翁は、兼てより勅語の御趣旨を畏みて、博援旁證して、我が生徒に教へ授けらるゝ、常に熱誠を灑きて、感化に至らざる所なく、殊に勅語の御詞を口に誦み奉る時に至りては、感極りて詞絶え、しはし打沈みて講筵滿坐、水をうちたるかことくなりぬること、屢なり、その生徒の腦裏に浸染せる、最深きを見るに足る、かゝれば翁のゆく末長く我が校にありて、教育に力盡されんことは、皆人の切に望む所にして、翁もその髪染めすして尙黒く、齒補はすして未だ全かるを、其謙讓の念、と、めかたくやあらん、こたひ辭して、故山に歸らんとひひ出てられしかは、生徒欽慕の情にたへず、いて勅語の

演説を摺卷にして、記念にもせむとて、余に序を乞ふ、余尤も翁の去を惜しむ者なれば、いなみかたく、こゝに謹みて勅語のありかたきゆゑよしを述へ、併せて翁の斯の道に盡されし程を一言篇首に冠す

明治二十八年卯月のその日

第五高等學校長 中川 元

木村弦雄
氏の跋文



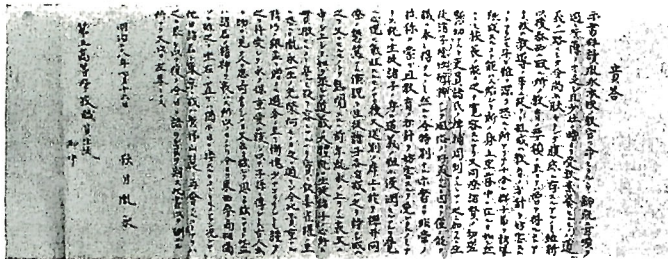
而して木村弦雄氏の「勅語演説跋」は、
教育ノ勅語學者ノ解釋スルモノ極メテ多シ井
上文學博士赤松連城師以下十數人ニ下ラス皆
各長スル所アリ秋月章軒翁頃者亦ク勅語演説
ノ著アリ予受テ之ヲ讀ムニ義ヲ釋スルコト明
晰ニシテ意ヲ用ユルコト懇篤ナリ意フニ衆解
中ノ出角ナルモノナルヘシ蓋翁ノ學ハ實跡ヲ
主トス長スル所説明ノ巧ニアラスシテ而テ心
得ノ孚ニ在リ衆解ニ超ル以所ナリ若夫章句ノ

末彫琢ノ工ニ至テハ豈ニ翁ノ務ムル所ナラム哉謹テ一語ヲ卷尾ニ書シ以テ翁ノ微意ニ答フト云爾

後學 木村 弦雄

因りて思ふに、勅語演説は、御下賜の明年を以て奉進せられたものであるが、二十八年章軒翁の吾が校を去るに

山高水長集と鎮西餘響



秋月草軒翁の禮狀

臨んで、感銘を蒙つた生徒によつて印行を企てられたものであることが、中川校長の序にも見えてゐる。古稀翁の心得躬行に基づくところの講義は、講筵に侍した人々の、今に以て語り草となつて居り、又、當時の龍南會雜誌などにも、屢々見えてゐるところであるが、その校を辭して此地を去るに臨んで、山高水長集や鎮西餘響などを物して、之を翁に贈つてゐることを以てするも、その人格的影響の如何に深甚であつたか、察せられる。而して又、我が五高同窓會が曩に秋月先生特輯號の會報を刊行した所以でもあるのである。

註 下賜ノ勅語ハ御親筆ナルヤ果シテ然ル中ハ職員生徒奉迎スベクニ付御報示ヲ乞フ
(一月八日付平山校長宛電文)

勅語ハ御名丈親筆也奉迎等ノ事ハ郵便ヨリ(一月九日付平山校長ヨリ返電)

生徒

今般教育ニ關スル宸署ノ勅語ヲ奉持シ平山校長不日歸校ニ付右勅語御到着ノ際市外ニ於テ職員生徒一同奉迎致スベク管ニ付同時制服着用校内へ參集スベシ

但時日ハ追テ相示スベシ

右豫メ揭示ス

明治廿四年一月十九日

第五高等中學校

生徒

過日揭示置候 勅語奉迎トシテ明廿三日午前第九時當校へ參集スベシ

右揭示ス

明治廿四年一月廿二日

第五高等中學校

生徒

本日 勅語奉迎トシテ參集之儀揭示置候處已ニ昨夜御到着ニ付テハ本日校内ニ於テ奉拜セシムベシ

但奉拜ハ體操教員ノ指揮ニ依ルベシ

右揭示ス

明治廿四年一月廿三日

第五高等中學校

文甲六號 一月廿一日受付第二二號

教育ニ關スル勅語親署ノ分既ニ下附相成候處尙勅語謄本並ニ文部大臣訓示各二葉交付相成候條御受領有之度此段申進候也

明治廿四年一月十六日

文部省總務局長辻新次郎

第五高等中學校校長平山太郎殿

追テ本文謄本並ニ訓示一組ハ貴校醫學部へ交付ノ分ニ有之候右申添候也

謄本並訓示ハ別便差立候也

第五節

第一回卒業式と送別會、附二十五・六年に於ける本校

第一回卒業式概況

本校創業の際に於て、遠大の抱負を以て豫科第三級に入學した二十四名並に六十一名の假入學者中、學業に、運動に、將龍南會の創立に、不斷の努力を續けること五星霜、茲に首尾よくその業を了へた一部法科生四名・同文科生二名、二部工科生五名、同理科生三名、合計十四名の人々に對する晴れの第一回卒業式は、二十五年七月

第三章 新校建築と其後の第五高等中學校